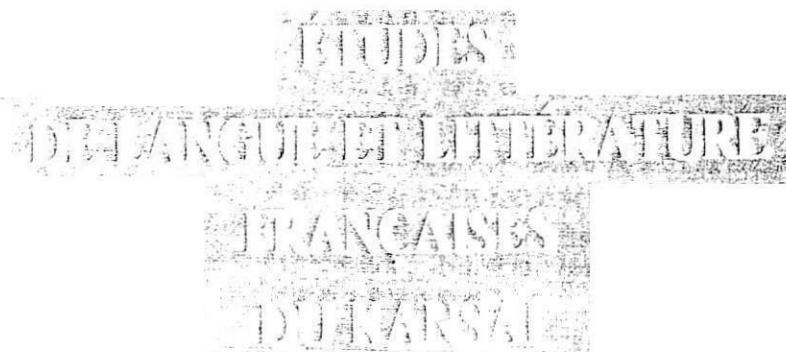


関西フランス語フランス文学



No. 6

日本フランス語フランス文学会関西支部

— sommaire —

Les Salons littéraires dans

La Précieuse ou le Mystère des Ruelles

..... Hiromasa AWAN

Une Topologie de *l'Abbesse de Castro* : un titre au fil rouge

..... Akemi YAMAMOTO

Récit et histoire chez Nerval : autour des *Faux Saunières*

..... Keiko TSUJIKAWA

Le Matin de Pâques du 30 Avril

..... Risa AÖYAMA

Le Problème de l'« Ecriture » et la Photographie dans

L'Empire des Signes de Roland Barthes

..... Ryûta KOIKE

Francis Ponge ou le passage d'une écriture fermée

à une écriture ouverte Asako YOKOMICHI

Société Japonaise
de Langue et Littérature Françaises
du Kansai

目的 (but)・afin de の表現に関する 意味論的分析

三 石 博 行
Eddy VAN DROM

「意向・目的 (intention)」に関する表現は、自己の意志や意図に基づいた標的としての but と、他者や事象が行う行為の目標である destination の、二つの要素によって構成されている。ここでは、but の意味の構造に関して議論を要約して紹介する。

but は、24 の前置詞、19 の接続詞、16 の副詞、32 の動詞、15 の名詞と 8 の形容詞などの代表的な表現があるが、その中の接続詞 *afin de* に関する一つの例文を示し、目的表現に関する議論を進めたい。

L'homme est resté silencieux (A) *afin de ne pas se compromettre* (B)
訳 危険に巻き込まれないように静かにしていた。

この例文は、その行為の結果の意味を含む文 A と、その目的自身を説明している文 B から成っている。目的を表わす用法 *afin de* で、主語である *l'homme* が未来の結果として想定される「危険に巻き込まれ」る事態やその可能性を避けるための手段として「静かにしている」行為を選んでいる。しかし、現実に選択した「静かにしていた」行為が、必ずしも「危険に巻き込まれない」結果を導くとは限らない。*afin de* の意味には、未来の結果に対して取られる解決手段の可能性が隠されている。

歴史言語学的な視点から観ると、10世紀の古フランス語では、*fin* のみが目的の表現として使われていた。この *fin* は 1273 年に *à la fin* という場所と結論の表現に発展し、また 13 世紀の後半に *à fin* という目的を示す表現が生まれ、*à fin* から *afin que* という表現が 13 世紀に発生する。1280 年代には、*à la fin que* と *afin que* が同時に目的を示す表現として使われて、14 世紀にな

って *afin de* という表現が作られる。つまり、*but* の用法である *afin que* も *afin de* も語源的には、*fin* から 13 世紀と 14 世紀に生みだされたものである¹。

現在の用法でも *fin* は、場所的な終わりの意味を持つ。場所の意味が語源的に最も古いのだが、*fin* は終わりという場所のニュアンスに現在という時間のニュアンスが直接的に重なることで結論の意味が生まれたと考えられる。さらに *fin* の目的的用法は、*fin* の持つ終わりという場所のニュアンスに未来という時間のニュアンスが重なり、未来の帰結・目当てのニュアンスから、生じたと考えられる。*fin* から生じる、結論と目的的意味の発生過程を以下に示す。

1. 現在の終わり → 現実の帰結 → 決着、「現在という時間的ニュアンスと終わりという場所のニュアンス」 = 結論
2. 未来の終わり → 未来の帰結 → 目当て、「未来という時間的ニュアンスと終わりという場所のニュアンス」 = 目的

この過程に関する説明は、既に示したランガージュとしての言語活動から、象徴的意味論の場、つまり前意識的表現への過程の言語活動のモデル³⁾で説明した。そのモデルを使えば、以下のような表現となる。

(R, N) ◇ (S) ◇ (T-passé et T-présent) = Conséquence,

(肯定的・否定的精神活動) ◇ (空間) ◇ (時間性、過去・現在) = 結論

(R, N) ◇ (S) ◇ (T-futur) = But

(肯定的・否定的精神活動) ◇ (空間) ◇ (時間性、未来) = 目的

但し、◇は意味演算子と仮定する

fin は空間的意味が土台にある。このニュアンスが時間的なニュアンスを結合し、*fin* の用語は幾つかの意味を持つことになる。意味の多様性や移行性の発生は、ことば本来の性質から来るものである。場所の意味が目的を示す意味へ移行することを共時的構造の変換現象と呼ぶが、この変換現象は日常時に起こっている通時的なことばの揺らぎ現象から来るものであり、それらがコミュニケーション可能な、つまり交換可能な形式として社会的に認められたとき、言い換えると社会的文化的な規則が成立したとき、意味の構造変更がなされると考えられる。

[注]

- 1) Rey, A. (sous la direction de). *Dictionnaire historique de la langue française*, Le Robert, Paris, 1993
- 2) 三石博行, VAN DROM, Eddy 「フランス語におけるパロールから象徴的意味・前論理的表現への過程について」 in 「フランス語フランス文学」, No 74, 白水社, 東京, 1999. 10, p. 121

三石博行 (金蘭短期大学助教授)

Eddy VAN DROM (阪南大学非常勤講師)